

「受けるよりは与える方が幸いである」 (使 20:32~35)

今日の箇所にはイエスの言葉として、「受けるよりは与える方が幸いである」が記されていますが、パウロは手紙のなかで、イエスの言葉を語ることはありません。また、このような言葉は福音書のどこにもありません。また、パウロの手紙には「与える」を「受ける」に優先させる考えは見られません。ところで、35 節に近い文章がパウロの名によって書かれたエフェソの信徒への手紙 4:28 に見られ、「与える」ことを「受ける」方に優先させているのです。この手紙はその成立年代が 80~90 年代であり、使徒言行録が書かれた年代に近く、形式的には「エフェソの信徒」に宛てられています。また、使徒言行録が著された時代の前後には、「受けるよりは与える方が幸いである」に類する言葉が、「主の教訓」、あるいは一般的美徳として伝えられていたと思われる。

イエスは、人々に「与えなさい」と命じていますが、「与えるほうが受けるより幸い」とは言っていない。イエスは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。」と言い、使徒言行録のパウロは、持っている者の立場から、「受けるよりは与える方が幸いである」、と言うのです。確かに、自分が持っているものを人に与えることができれば、そして与えられた人がそれを喜んでくれるのなら、それは嬉しいことです。しかし、その人たちが自分たちは与える者なのだから、「受ける者よりも幸いなのだ」、と言うとしたら、それは持てる者の傲慢ではないかと思うのです。社会的弱者と共に食事をし、共に歩んだイエスには使徒言行録のパウロがイエスの言葉として引用した「上からの目線」は少なくともなかったと思われます。

初期キリスト教の歴史において、信仰共同体の孤児や寡婦などの社会的弱者救済の活動はキリスト教の伝播に大きな力となりました。しかし、そこにはイエスの社会的弱者に寄り沿った視点からよりも「受けるよりは与える方が幸いである」という「上から目線」があったのではないのでしょうか。それはヤコブの手紙などにも記されています。

今、「受けるよりは与える方が幸いである」の視点である、経済的に比較的豊かな先進国において、キリスト教徒の数は減っています。一方、「求めなさい。そうすれば、与えられる。」の視点である、経済的にはまだ貧しい後進国においては、キリスト教徒の数は増加しています。私たちは「受けるよりは与える方が幸いである」という言葉をいうときに、イエスの社会的弱者に寄り沿った視点と、その根底にある「求めなさい。そうすれば、与えられる。探みなさい。そうすれば、見つかる。……」を忘れないことが大事なのではないのでしょうか。本当に求めるべき、探すべき、門をたたくべき相手を知り、その方に、求め、探し、門をたたきつつ生きるところにこそ、良いもので満たされていく人生が与えられるのです。